

JOUSEN

愛教研八幡浜支部 情報宣伝部だより

— 市長と教育を語る会 —
平成30年7月31日(火)開催

平成30年9月10日発行

去る7月31日(火)、愛教研八幡浜支部法制対策部・情報宣伝部共催による「教育を語る会」が、センチュリーホテル・イトーにて開催されました。今年度は八幡浜市長大城一郎様から「教育に求めるもの」をテーマに、今後の八幡浜が目指す方向について話をいただきました。以下、そのときの講話内容について掲載いたします。

1 開会あいさつ並びに講師紹介

先日の豪雨により多数の尊い命が失われた。八幡浜市内でも家屋を失われた方がおられることを聞いた。心が引き裂かれる思いである。一日も早く復旧されることを切に願う。

さて、愛教研八幡浜支部が毎年実施する「教育を語る会」は、3つのテーマを設定している。3つのテーマとは、「法令担当者と教育を語る会」、「保護者と教育を語る会」、そして「市長と教育を語る会」である。いずれも会を重ねる度に大きな成果を上げている。中でも今回の「市長と教育を語る会」は、教育行政との連携を強化し、教育課題について研修を深め、よりよい教育を推進していくという意味で大きな期待をしている。本日は、八幡浜市長大城一郎様を講師としてお迎えし、「教育に求めるもの」と題して講演をしていただく。大城市長は就任後、行政改革での部長制度の導入、また道の駅「みなと」や名坂道路の整備など、ふるさと八幡浜の未来のために精力的に活動を展開しておられる。53歳という若さあふれる市長の今後のご活躍にも期待している。

「教育は国家100年の大計にあり」という言葉がある。教育は国家の行く末を左右するほどの大義があり、長きに渡り積み重ねていって初めてその成果を得ることができるという意味である。これは逆に言うと、我々教師に向けられた期待の大きさにも比例すると捉えられる。本日は、こうした意味からも大城市長様から意義あるお話が聞けることを楽しみにしている。

2 講話

教育を語る会ということだが、今一番何を語らなければいけないかという、平成30年7月豪雨の被害のこと、そして台風12号の動きなど、自然災害のことだと思う。これまでは何十年に一度の大雨や災害だったが、年々自然災害が過酷になり、毎年のように大きな災害が起こっているように思う。愛媛県でも南予を中心に、大きな被害が出た。私も次の日に大洲市に行ったが、商店は流され、浸水などの被害が出て、人々が復旧作業をしていた。道路は寸断され、橋も流されており、

愛教研八幡浜支部長 関岡 寿登



八幡浜市長 大城 一郎 様



復旧するにはかなりの日数と費用がかかると感じた。その後、肱川沿いに上っていったが、道が寸断され、城川町経由で野村町に行った。家がなくなり、乙亥会館の2階まで水がつかっており、災害の爪痕が残っていた。そんな中、近所の人が一丸となって復旧作業に当たっていた。その後、吉田町にも行く予定であったが、行くことができなかった。今後も吉田町や八幡浜市内などの被災地を巡る予定である。今日は、この豪雨の際に八幡浜市がどんな対策をとっていたのかをまずお話をしたい。

<平成 30 年 7 月豪雨における対応について>



教育においても、安全・安心が一番大事だと思う。先日の地震により大阪で尊い命が奪われたが、どこにでも起こりうることである。安全・安心を確保するためには、ハード面とソフト面の両方からのアプローチが必要である。まずハード面に取り組んでいかなければならないが、お金が掛かることでもある。今回の7月豪雨の件については、ソフト面について中心にお話ししたい。

7月6日午前10時過ぎに大雨警報が発令された。市では災害対策本部を設置し、災害対策本部会議を行うことになる。そして午後4時頃に土砂災害警戒情報が出たので、見回りをしたところ、神越地区で浸水が起っていた。しかしその時点では、テレビで何十年に一回の大雨になると言われていたが、まだ市内全体では、本当に来るかなという雰囲気であったと思う。

深夜1時に第3回の災害対策本部会議をし、早朝6時に第4回の会議を行うことを決定し、解散した。もちろん避難所は早くから開かれており、自主避難をされる方への体制もとっていた。しかし、深夜2時頃から大量の雨が降り始め、千丈川の河川水位が3mを越した。そこで、急遽、臨時の災害対策本部会議を開くことに決めた。すぐに、河川に近いところだけでも、消防車や広報車を走らせ、氾濫危険情報を流した。1階から2階への垂直避難や山際から遠い所に移動するように、河川の近辺を回った。そして4時にも臨時対策本部会議を開き、あらゆる情報を集めた。市民の安全・安心を守るためには、夜中であっても避難勧告を発令しなくてはならないという結論に至り、4時46分に市内一斉に避難勧告を出した。ただ、避難勧告を出しても市民の皆さんになかなか周知してもらえない。そこで、サイレンを鳴らすことでまず起きてもらい、こんな災害の降りかかっている旨を伝えたいと考えた。なお、後から、避難勧告と避難指示との違いが分かりにくいとの指摘があった。避難準備情報、避難勧告、避難指示の違いが分かりにくく、避難命令という言葉があれば分かりやすいという話を国とした。

今回は、日土地区、須川奥地区、南柏地区で土砂災害などがあり、八幡浜市にとっては今までに体験したことがない大きな災害となってしまった。人的被害、死傷者がなかったことが幸いだった。須川奥地区の災害については、ハード面では、昭和18年に起こった土石流後に作られた砂防ダムが機能した。もしもこのダムがなければ、ダムより下の民家にも相当な被害が起こったのではないかと予想される。ハード面だけでなく、須川奥で機能したのがソフト面である。消防団が非常に頑張り、土砂災害警戒地区の1件1件を回って避難を呼び掛け、6時30分には全員が避難を完了していた。そしてその10分後に家を押流すような土石流が起こった。消防団の頑張りがないと人的被害があったかもしれない。このように、ハード面とソフト面、両方が必要である。

また、どう言えば避難してもらえるか、どんな言葉をかければ人は動いてくれるのかが、今回の課題となった。「避難してください」と呼びかけても、うちは大丈夫だろうという人がけっこういる。例えば、ある自治体では、「この放送が最後です。私たちも避難します。」と伝えたところ、住民は避難を開始したようである。お年寄りも、さらに言葉掛けが難しい。「お孫さんが悲しみますよ。」というように言うと、分かってもらえたという話を聞いた。人の命を救い、的確に行動してもらうために、こちらがどう行動するか、どう言葉を掛けるのか、それを今回の災害で考えさせられた。これは、教育でも同じだと思う。その場面を一生に一度と捉えながら、どう伝えれば子どもたちの心に届くのか、反応してもらえるのかを考えて教育に当たっていただきたい。

<海外の事業について>

次に、災害以外での市の取組をご紹介します。一つ目は、海外の高校生による日本語スピーチコンテストである。16の国・地域から17名が八幡浜市に集まり、スピーチを行った。彼らは日本の歴史について、流ちょうな日本語で理路整然と話していた。その後には、先生のインタビューにも答えていた。日本語を構成して物語を作り、それをまとめ、日本語で発音し、伝えていくことは準備をすればできるかもしれない。しかし、先生との一対一の質問にも答えられるということは、日本語をしっかり理解していないとできないことである。高校生が自分の故郷を離れて、この八幡浜で活動している姿を見て、逆に八幡浜の子どもたちも、外国に行き外国語で自分の考えを話せるようになってほしいと感じた。

：教育を語る会



二つ目は、台北のデパートで行った愛媛八幡浜フードフェアである。そこには、みかん、じゃこ天などの特産物を出品した。「遠きをはかる者は富み 近きをはかる者は貧す」というように、先のことを考えて取り組むことが大切だと考える。もちろん本市だけでなく、他の自治体も出品しているが、本市だけは、約2週間、市の職員や出品者が英語を交えて毎日交替で説明しながら販売をしている。他人任せにしないで、八幡浜のよさを伝え、人情を合わせて売ったと言える。2年目には現地の人も仲良くなり、コミュニケーションがとれ、より一層売れるようになった。3年目になる来年は、もっと立地条件のよいところで販売できるように取り計らってもらっている。店の人にも八幡浜市の心意気が分かてもらえたのではないと思う。このように、今回は市がブランド作りを行ったが、その後は出品者の方に頑張って売り込んでもらい、つながっていけばと思っている。

三つ目は、来年5月12日から行われる「ワールドマーマレードアワードフェスティバル」である。これは、イギリスの湖水地方ダルメインで行われているもので、今年で13回目になる。40カ国から3000点以上、日本からも600点以上が出品されており、八幡浜のアトリウムさんが2年連続で金賞を受賞した。このマーマレードアワードを日本で開きたいという話が持ち上がり、日本大使館、外務省、中村県知事などの理解を得て、八幡浜での開催に漕ぎ着けた。マーマレードは柑橘のPRにもつながるので、チャンスととらえて頑張っている。このように、いろいろな話がいろいろなところから持ち上がることがある。その時に、一歩踏み出してやってみようという子ども達を育ててほしい。一歩引いて、あるいは後ろを向いて、挑戦しないよりも、とにかく挑戦してみるようになってほしい。マーマレードアワードの準備段階でも、いろいろな意見があったが、マ

一マレードは柑橘からできるのだから、世界の中で八幡浜市の柑橘をPRしていくチャンスになると考え、チャレンジすることにした。イギリスの視察では、同行している今岡部長からの提案で、現地のセミナーにおいて、英語でアピールする機会をいただき、私も15分間、英語でスピーチを行った。また、オックスフォード大学やロンドンのビジネススクールでも有意義な交流をさせてもらった。この経験を通して、やはり英語ぐらいは話せなければならないと感じ、いつまで経っても勉強だなと思った。ましてや、小学校や中学校の多感な時期に、より多くの経験をすることはとても重要である。その経験が基になり、後々芽が出て、花が咲き、大きな事につながるのではないかと思う。自ら進んでやる子どもをぜひ育てていただきたい。やはり、何をするにもコミュニケーションが大切である。今回、英語や中国語を話す機会があったが、外国語以外にもその機会があった。6月に聴覚障害者の集いが八幡浜で開かれた。その時は、手話でコミュニケーションをとった。(市長が手話を披露)。外国語、手話何でもチャレンジして、コミュニケーションがとれれば仲間ができる。そして、自分からアプローチすることが大切である。

八幡浜の高校生は、素晴らしい。駅伝や水泳、ソフトテニスなどのスポーツ、ロボットコンテスト、商業、農業研究など、様々な分野で頑張っている。特に農業研究において、グローバルGAPの認証を取得し、それに関わった生徒は、将来、ふるさとの農業に従事したいと考えている。高校生でこれだけ頑張れるということは、小学校・中学校での教育の成果でもある。これからも世界に誇れる八幡浜の子どもを育てたいものである。そのためにも、学校のソフト面・ハード面の充実を図っていきたいと考えている。

今日は、現在の八幡浜市政から、どのような子どもたちを育てたいかの一端をお話した。

3 謝辞並びに閉会あいさつ

今日は、市民の安全安心や世界交流、コミュニケーションについて話していただき、大変参考になった。私も先日の豪雨の夜、対策本部からの放送を2回聞き、雨がひどく川が溢れそうになって2階に避難した。雨で怖いと思ったのは初めてだった。今日のお話をお聞きし、地域の安全・安心についても少し考えてみようと思った。これからも対策本部からの放送を頼りにしている。よろしく願いたい。

会員の皆様には、お忙しい中お集まりいただき、お礼を言いたい。残りの夏休み、しっかりリフレッシュして、2学期からに備えてほしいと思う。

愛教研八幡浜副支部長 元田 親平



愛教研八幡浜支部情報宣伝部会では、ホームページを開設し、会員の皆様の活動や部会に関する情報を随時更新しています。時々閲覧していただき、情報を提供していただけるとありがたいです。よろしく願います。

HPアドレス ☞ <http://aikyouken.jp/>